

「ベティの小さな秘密」

☆☆☆

2008（平成20）年11月1日鑑賞<テ
アトル梅田>

監督・脚色：ジャン＝ピエール・アメリス

原作：アンヌ・ヴィアゼムスキー

脚本・台詞・脚色：ギヨーム・ローラン

ベティ（エリザベス）（10歳の少女）／アルバ＝ガイア・クラゲード・ペルー
ジ

レジス（ベティの父親）／ステファヌ・フレイス

マド（ベティの母親）／マリア・ド・メデルシユ

ローズ（家政婦）／ヨランド・モロー

イヴォン（精神病院から逃げ出してきた青年）／バンジャマン・ラモン

犬舎の男／ダニエル・ズニク

アニエス（ベティの1つ年上の姉）／ロリアヌ・シール

学校の先生／オリヴィエ・クリュヴェイエ

2006年・フランス映画・90分

配給／ヘキサゴン・ピクチャーズ、アステア

<こういう体験が小説に>

「小説を書く」となると相当身構えるものだが、この映画の原作を書いたアンヌ・ヴィアゼムスキーの言葉によると意外にそうでもないようだ。つまり、パンフレットの冒頭にある彼女が書いた「小説について」によると、親しい女ともだちが突然語った、少女の頃に精神病院を逃げ出してきた患者を3日間かくまったというエピソードを聞き、彼女は自分でその物語を自由にまとめ、膨らませていったらしい。それが、少女ベティから大人の女性エリザベスに変わっていくというこの映画の原作。

なるほど、小説ってそんなちょっとしたヒントとストーリーの核があれば書けるわけだ。

<主人公は誰が？>

そんな少女を主人公にした原作を映画化するについて、何より難しいのは主人公のイメージにピッタリの俳優を探し出すこと。この手の少女を主人公とした映画は、その人選によって成否が大きく分かれるはず。『ぜんぶ、フィデルのせい』（06年）では、父親と母親がキョーサン主義に走ることに不満な9歳の少女アナナ（ニナ・ケルベル）のふくれっ面が魅力だった（『シネマルーム18』94頁参照）。また、『パンズ・ラビリンス』（06年）では、スペイン内戦という厳しい時代状況の中、魔法の世界のプリンセスとして、幻想の世界に入っていく少女オフィリア（イバナ・バケロ）が印象的だった（『シネマルーム16』392頁参照）。さてこの映画でベティを演じたアルバ＝ガイア・クラゲード・ペルーの魅力は？

<テーマは、ベティからエリザベスへ>

映画の冒頭、姉のアニエス（ロリアヌ・シール）と共に丘の上にある無人のお屋敷探検に赴いたベティだったが、勝手に開いた邸宅の扉を見て怖くなり、必死で自転車をこいで自宅に戻るシーンが登場する。怖がり屋のくせに好奇心の強いベティはもう一度お屋敷に行こうとアニエスを誘うが、既に寄宿制の中学校に入る準備をしているアニエスはいつまでも子供の遊びに付き合ってくれないようだ。この年頃の少女では1歳違いが大きいし、小学生と中学生とでは大違いなのだ。

ベティの正式な名前はエリザベスだが、家族も仲間もみんなベティと呼んでいるのは彼女がまだ子供だから。さあ彼女はいつになれば、ちゃんとエリザベスと呼んでももらえるのだろうか？

<2人の精神病患者に注目！>

ベティの父親レジス（ステファヌ・フレイス）は美しい妻マド（マリア・ド・メデルシユ）と共にでっかいお屋敷に住んでいるが、「職住接近」を地でいくライフワークで、彼の職場はすぐ隣にある精神病院。つまり、彼はこの精神病院の院長なのだ。日本では精神病院はいわゆる嫌悪施設とされ、近くにそんな病院がくることには絶対反対となるが、それは精神病院の患者が怖いというイメージがあるため。しかし、この映画では2人の精神病患者に注目。

その1人はベティの家の家政婦として働いているローズ（ヨランド・モロー）。彼女が精神を病んだのは戦争で子供たちが殺されたためだが、昼間だけ通いで家政婦をしているくらいだから、性格は温厚で危険性はゼロ。他方、ベティが匡う精神病患者がイヴォン（バンジャマン・ラモン）。イヴォンは病院から逃げ出した彼をたまたまベティが自転車入れに使っている納屋の近くで発見したため、ベティが匡ってやることになった若い男性患者だが、この映画の後半は、ベティとイヴォンの2人だけの秘密がストーリー構成の核となっていく。もちろんこのイヴォンにも凶暴性は全くなく、逆に自殺の恐れがあるくらい。

そんな2人の精神病患者に注目！

<試練が次々と・・・>

一見誰がみても「いいところのお嬢さん」と思われるベティだが、姉アニエスとの別れをはじめとして（？）この映画ではベティに試練が次々と襲ってくる。

第1は大好きな両親のケンカ。その原因は、どうも母親に好きな男性ができたためらしいから、かなりやっかい。やはり子供の順調な発育のためには、両親が仲良く暮らさなければ。第2は転校してきた顔に大きなあざのある男の子カンタン（ヴィルジル・ルクレール）の、ちょっといじわるでエッチな（？）いたずら。第3は、今は犬舎の中に入っているベティがかわいがっていた大型犬のナッツを、今週中にパパを連れてこなければ安楽死させるという犬舎の男（ダニエル・ズニク）からの脅迫（？）。

そして第4に何よりも大きい試練は、せっかく納屋の中うまくイヴォンを匡い、食事の世話もしっかりしていたのに、その納屋を取り壊すと宣言されたこと。ママは家を出ていくし、犬のことをパパに話してもとりあってくれないし、いよいよ明日は納屋の取り壊し。そのうえ学校では、カンタンのいたずらにハマってしまったことによって死ぬほど恥ずかしい思いを。

<ベティの決心とは？どんなクライマックスが？>

次々とこんな試練に見舞われたベティは、遂にある決心を！それは何と、遺書を残してのリストカットだった。しかし、ガラスを手首に当てている最中に、窓の下に1度は別れたイヴォンの姿を目にするとベティの決心は精神病患者のイヴォンと安楽死を免れたナッツを伴って新たな旅立ちの決心をすることに変更。わずか1週間足らずの間にこんなにたくさんの試練を受けたベティは大きく成長したはずだが、さあベティは一体どこへ向かって脱出を？

それは、映画冒頭に姉のアニエスと共に探検に赴いたあの無人のお屋敷。あの時は勝手に開いた扉におびえて逃げ出したが、今回はイヴォンとナッツを従え、リーダーとしてそこに向かっているのだから、弱みを見せてはダメ。そんな風に多少気負った姿勢がうかがえるベティが、無人のお屋敷の中で見たものは？他方、ベティが家出したことに気付き、必死で捜し回っていた父や母そして姉がこの無人のお屋敷でベティを発見した後、そこでおきた騒動とは？

それまで淡々と進んでいた物語は、ここではじめてドラマティックな動きを見せクライマックスを迎えるからそれに注目。しかして、そんな大騒動が終わった後、ベティは本当にエリザベスになれるのだろうか・・・？

2008（平

成20）年11月13日記